

札幌市立手稲西中学校の取組

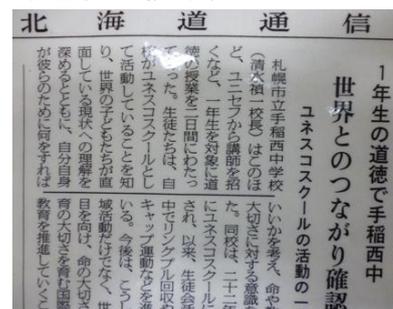
1. 研究のねらい

本校は平成 23 年にユネスコスクールに加盟した。ユネスコスクールとは、ユネスコ憲章前文の一節「戦争は人の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」の精神を実現するため、次の四つのテーマⅠ地球規模の問題に対する国連システムの理解、Ⅱ人権・民主主義の理解、Ⅲ異文化理解、Ⅳ環境教育を教育活動に位置付け、シンクグローバリー・アクトローカリーの視点に立ち、「つながり」と「関わり」を意識し実践していく学校である。とりわけ、現在、文科省では ESD（持続可能な開発のための教育）を平成 32 年改訂予定の新学習指導要領に位置付けることを見据えて、平成 27 年 12 月 5 日の第 8 回 ESD 全国大会で現、馳浩大臣が「ユネスコスクールが ESD の先導的な役割を果たすよう」自ら呼びかけた。本校も、その使命を果たすべく、加盟 5 年間の実践の中から、国際理解に関して「Ⅲの異文化理解のテーマの授業実践をどの学校でも行える実践」として紹介することをねらいに、以下の 3 例の外部講師を招聘・活用する授業開発を行った。

2. 取組内容

(1) 「途上国の子どもたちの現状」の講話を取り入れた中学校 1 年道徳の授業実践

道徳の内容項目 4 (10) に国際理解・平和の授業で、「途上国の子どもたちの現状」を、学年道徳として北海道ユニセフ協会重原裕治事務局長を外部講師に招いて、途上国の子どもたちの現状を映像と講話で紹介し次の問題を示していただいた。「貧困、紛争、栄養不良、病気、児童労働、少年兵士、5 歳までの生存率の低さ、学校に通えない、学校がない、教育を受けられない現実」等。特に、生徒たちは、少年兵士にならざるを得ない現実や、教育を受けていない少年兵士が一番残忍な殺し方をする機械のような人間になってしまうことに驚いた。また、感想には、教育の大切さ、自分たちは恵まれていること、大人になるまで生きることが途上国の子どもたちの夢であることを知り、何かしてあげたい、勉強を頑張りたいなど自分たちを振り返ると同時に、国際貢献や自分や日々の生活を大事にする意志を強くもてたことが書かれていた。ユニセフの外部講師の講話の活用は、どの学校でも「途上国の子どもたちと自分たちの比較」ができ、シンクグローバリー・アクトローカリーの意識の醸成ができる授業効果を生みやすいように思われる。



(2) 自国の文化を知ることは異文化理解の礎！

3 年家庭科「和装着付け教室」の授業実践

NPO 法人日本時代衣裳文化保存会(小林豊子きもの学院北海道本部)伊藤豊美講師を外部講師に日本の礼儀作法や浴衣の着付けを学び、日本の伝統文化について生徒たちが理解を深めた。異文化理解のためには、自国の文化も理解すべきと考え実践した。伊藤講師は「着物は日本の民族衣裳であり、平安時代の十二単衣が始まり、一千年以上形が変わらず続いてきた日本の素晴らしい文化、また着物の素材である絹はカイコの命をもらって作られ



ている。ありがたい気持ちを込めてたたむことが大切。あいさつをしっかりとすることで、自国や外国の人にもイメージアップできる。」と強調し、正しいあいさつやおじぎの練習、着方や帯の結び方を習い、生徒たちは実際着用した。グローバル社会、異文化共生社会において、英語ができることだけでなく、自国の文化を説明できることも、その資質になると考える。

(3) 札幌国際プラザ姉妹都市外国人交流員招聘・活用した2年技術科「異文化理解と他国のネット事情・モラル」の授業実践



札幌市の姉妹都市ミュンヘンと大田広域市の札幌国際プラザ交流員、ドイツのウリヤミツキさん、大韓民国のソンミンジュさんをお招きし、コンピュータ室でパワーポイントをディスプレイやスクリーンに映し、二人から母国語で自己紹介、

簡単な母国語の挨拶（生徒も一緒に発音）、気候風土、食文化、民族衣装、祭り、名物、若者の様子等、異なる国の文化（異文化理解）の話に、生徒も大変興味深く学習した。ネット事情では今、話題の通りドイツは移民、難民を伝統的に受け入れた国柄でネットトラブル、国全体のブームは無い。逆にネット先進国の韓国は携帯の普及率は110%で世界トップ。「男性アイドルとツーショットを撮った女性ファンがネット上で誹謗中傷にあう」などとショッキングな話はあるが、LINEやSNSの既読、未読等からネットいじめに発展はしない等。生徒からの質問も多く、とても楽しく有意義だった。今回は技術科に限定したが、どの教科でも、授業の目標に沿って、外国の事情も比較して外国人から直接、説明を受けることによってインパクトがあり、大変興味を高める授業、あるいは豊かで幅広く楽しい授業になり、この実践は、在札施設の外部講師を活用しながら行える授業であり、ほとんどの中学校で実践が可能な内容となっている。

3. 成果と課題

(1) 成果

- ①「途上国の子どもたちの現状」の講話を取り入れた中学校1年道徳の授業実践では、生徒に講話の後半、「今、自分たちが途上国の子どもたちが教育を受けられるために1番先にできることは何か。」を問うてみたところ以下のような回答となった。

「書き損じはがき、ペットボトルキャップの寄付」(世界寺子屋運動、ワクチン寄付関連) →26名
 「教育の大切さや途上国の暮らしを調べる」 →21名
 「募金活動」 →3名 「NGOに参加する」 →3名 「学校祭で取り上げる」 →2名
 「身近な人にも伝える」 →1名 「将来政治家になって国を動かす」 →1名

本校でも生徒会福祉局が、ユネスコスクールとしても行っている、ペットボトル回収、募金活動を積極的に進めており、シンクグローバリー・アクトローカリーや世界との「つながり」や「かかわり」を意識する、国際理解につながる教育活動となった。

別にユネスコスクールでなくても、一般の学校でも一つの講話を通じて、「世界はつながっているのだ」ということに目を向けられる教育活動となるだろう。

② 3年家庭科「和装着付け教室」の授業実践では、友だち同士で直し合い、真剣な姿勢で取り組み、生徒たちは「似合っているかしら」と照れながらも自分の着物姿に満足していた。体験を通して、日本文化を知り、日本人の誇りを感じたり、自国の文化を説明できる人になっていくだろう。昔から代々伝えられてきた日本文化を日常生活でも生かしてほしい。なお、これは例年行っているが、卒業生から「高校の学校祭で皆で浴衣姿になった。その時先頭に立って教えることができた。」とメッセージを寄せてくれた。この活動も講師の講話や浴衣着付けを通して、一般校においても日本文化や日本人のアイデンティティを身に着けられる教育となるだろう。

③ 2年技術科「異文化理解と他国のネット事情・モラル」の授業実践では、身近な外国人に講話いただくことにより、異文化に触れ、自分の国の在り方、この場合はネット事情やモラルを考えさせることにより、授業における生徒の興味関心を高め、それを原動力として、スパイシーで幅広く、豊かな授業構成となった。また、札幌市の姉妹都市であるドイツミュンヘン市と大韓民国大田広域市からの交流員のお話は、札幌市と姉妹都市の交流や友好にもつながり、是非、各教科、各教育活動でも可能なので、札幌市全体への普及をお勧めしたい。今回、打合せは時間もあまり必要とせず、スムーズに進めることができたため、「公益財団法人札幌国際プラザ」との連携も各校にお勧めしたい。

《今回の授業で生徒から出た主な質問》

- ・ 各国で人気の日本のものは？→共通してアニメ、ドラマ、小説、映画、日本料理（ラーメン寿司等）
- ・ 各国のお勧めことや場所は？→ビールオクトパーフェス（ドイツでは16歳から飲酒OK）
韓国大田広域市ではハッチョン群のヤマメ釣り
- ・ 各国で今はやっていることは？→ドイツは国全体でブームというものは無い。
韓国ではチマチョゴリが人気なくなり、あまり着られなくなったが、再びブームになってきた。皆でチマチョゴリを着て昔の建物を訪れるなど。
- ・ 無料アプリはありますか？→ドイツ WhatsApp 韓国 Kakao Talk

(2) 課題

グローバル人材を育成する要素は数多くあるが、今回は①途上国の現状 ②日本の伝統文化の認識 ③身近な外国人と接する中での異文化理解を考えた。この中で当初③に係ることとして、JICAの研修員受け入れについては時期の困難さがあり、また、ALT活用については目的の差異のため活用できなかったため、札幌国際プラザ交流員に依頼した。申請の簡便さ、時期の設定の自由度、費用は交通費のみ、打ち合わせや日本語での対応など利点は大きかった。今後は様々な教科、教育活動での活用を普及するとともに札幌の姉妹都市理解にもつなげたい。